

## 福島原発事故 10 年の経験から学ぶ — 当時小学生だった若者達との対話から —

平田 修三<sup>a,b</sup>、金 智慧<sup>b,c</sup>、鴨下 全生<sup>b,d</sup>、藤井 豪<sup>d</sup>、菊池 翔大<sup>d</sup>、  
櫻田 昂樹<sup>d</sup>、原田 光汰<sup>d</sup>、高村 柚奈<sup>d</sup>、越沼 愛美<sup>d</sup>、田中 翔大<sup>d</sup>、  
遠藤 凌佑<sup>d</sup>、小島 隆矢<sup>b,c</sup>、増田 和高<sup>b,e</sup>、桂川 泰典<sup>b,c</sup>、熊野 宏昭<sup>b,c</sup>、  
日高 友郎<sup>b,f</sup>、扇原 淳<sup>b,c</sup>、辻内 琢也<sup>b,c</sup>

Lessons from 10 years of experiences after the Fukushima nuclear accident  
— From the dialogue between young victims and researchers —

Shuzo Hirata, Jihye Kim, Matsuki Kamoshita, Go Fujii, Syota Kikuchi,  
Koki Sakurada, Kota Harada, Yuzuna Takamura, Ami Koshinuma, Shodai Tanaka,  
Ryosuke Endo, Takaya Kojima, Kazutaka Masuda, Taisuke Katsuragawa, Hiroaki Kumano,  
Tomoo Hidaka, Atsushi Ogihara, Takuya Tsujiuchi

- a. 仙台青葉学院短期大学こども学科 (*Department of Child Studies, Sendai Seiyō Gakuin College*)
- b. 早稲田大学災害復興医療人類学研究所 (*Waseda Institute of Medical Anthropology on Disaster Reconstruction*)
- c. 早稲田大学人間科学学術院 (*Faculty of Human Sciences, Waseda University*)
- d. 早稲田大学人間科学部 (*School of Human Sciences, Waseda University*)
- e. 武庫川女子大学文学部 (*School of Letters, Mukogawa Women's University*)
- f. 福島県立医科大学医学部 (*School of Medicine, Fukushima Medical University*)

## 1. はじめに

2021年11月28日(日曜日)に、早稲田大学大隈講堂において、「復興の人間科学2021」『福島原発事故10年の経験から学ぶ—当時小学生だった若者達との対話から』と題したシンポジウム(図1)が、早稲田大学人間総合研究センター主催、早稲田大学災害復興医療人類学研究所(WIMA)共催、科研費補助金(基盤研究B)『原発事故被災者の移住・帰還・避難継続における新たな居住福祉に関する人間科学的研究』共催、震災支援ネットワーク埼玉(SSN)共催によって開催された。会場参加者73名、ZOOM参加者226名であり、米国、ハワイ、カナダ、ドイツ、中国、台湾からの参加者もみられ、おおきな成果が得られた。また、当日収録の動画がYouTubeに公開されており、再生回数は12月末時点で800回を超え、社会においても大きな反響があったと考えられる。

## 2. シンポジウムの開催に至るまでの経緯・沿革

2011年3月11日に発生した東日本大震災および原発事故から10年が経過した。地震・津波被災者にとっては、大規模堤防建設や市町村の高台移転が完了し、復興に向けた大きな飛躍を目指す時期に入ってきた。しかし、福島第一原子力発電所事故により避難生活を余儀なくされた人々の多くは、いまだに生活基盤が確立しておらず、生活や人生における苦悩が継続している。

2011年に「人間科学学術院としても復興に役立つ学術的支援ができないだろうか」という教授会での問題提起を機に、有志の教員によって『震災と人間科学ネットワーク』が組織され、早稲田大学人間総合研究センター(人総研)主催シンポジウムを、2012年3月および2013年3月に開催した。2014年10月には、早稲田大学内外の専門家による『早稲田大学災害復興医療人類学研究所(WIMA)』を早稲田大学総合研究機構内に立ち上げ、現在に至る。2013～2015年の3年間は大学院人間科学研究科プロジェクト科目『災害の人間科学』、2016～2018年の3年間は人総研プロジェクト研究/大学院プロジェクト科目『復興の人間科学』、そして2020年からは科研費(B)を獲得し、このチームによる研究・調査・支援・教育活動が継続されている。またこの間、埼玉における民間支援団体である『震災支援ネットワーク埼玉(SSN)』との密接な協働関係を築き、さらには東京災害支援ネット(とすねっと)とも協働し、被災者の方々への直接的・間接的支援や交流会活動なども継続させている。こうした取り組みにより得られた成果は、これまでに著者『ガジュマル的支援のすすめ』、『震災後に考える:東日本大震災と向き合う92の分析と提言』、『フクシマの医療人類学』、『Human Science of Disaster Reconstruction』や国際誌・学会誌等での報告を通して、社会に広く発信してきた。

## 3. シンポジウム開催の目的・意義

原発事故による避難生活という過酷な人生体験を小学生の時期に経験した被災者は、今年で17歳～22歳となる。現在大学生となった被災当事者は、あの震災をどう受けとめ、またこの10年をどのような社会経済状況におかれ、どのような心理状態で、どのように思考を重ね、どのように生き抜いてきたのだろうか。

本シンポジウムの目的は、彼らのこれまでの10年の人生経験から、私たちが何を学べるのか人間科学的視座から問うものである。

具体的には、準備の段階から、心身医学・精神医学(辻内・熊野)、医療人類学(金・辻内)、発達心理学・児童福

“復興の人間科学 2021”  
『福島原発事故10年の経験から学ぶ』  
—当時小学生だった若者達との対話から—  
Learners from 10 years of experience after the Fukushima nuclear accident: From the dialogues between young victims and researchers

【ご挨拶】 10:00~10:10  
藤原 淳(早稲田大学教授・人間総合研究センター所長)  
平田 修三(シンポジウム実行委員長、仙台育英学院短期大学講師)

【第1部:被災当事者学生による講演】 10:10~13:00  
1. 被災当事者学生5名(双葉町・福島市・郡山市・いわき市出身)による講演:「原発事故10年の経験/いま考えること」  
2. 早稲田大学人間科学部学生による発表:「被災当事者学生へのインタビューを通して学んだこと」  
3. 研究者5名によるコメント(臨床心理学・社会心理学・建築環境心理学・行動医学・社会福祉学の立場から)

【第2部:基調講演】 14:00~15:00  
『現在大学生になる被災当事者との対話から私たちは何が学べるか』  
金堂 清(関西学院大学社会学部教授、災害社会学・環境社会学)

【第3部:パネルディスカッション】 15:10~16:40  
被災当事者学生5名と金堂清・坂原裕子とのクロストーク  
1. 原発事故10年の経緯の是非・是非を考える  
2. 東シブ3.11・ポストコロナの日本・国際社会のあり方考える  
3. 若者達による発言

【第4部:講演】 16:50~17:30  
『被災当事者の語りから何を学び取るべきか』  
坂原 裕子(震災支援ネットワーク埼玉SSN・心理相談チーム代表)

【第5部:シンポジウムのまとめ】 17:30~18:00  
横ヶ山 光一(早稲田大学名誉教授、勇進行動学)  
渡辺 正(震災支援ネットワーク埼玉SSN代表、弁護士)  
辻内 琢也(シンポジウム大会長、早稲田大学教授、早稲田大学災害復興医療人類学研究所所長)

2021年11月28日(日)10時~18時(無料・入場自由)  
於:早稲田大学大隈記念講堂(地下1階)小講堂  
Zoom同時開催(zoom参加の場合ネット申し込み制)

◆主催:早稲田大学人間総合研究センター  
◆共催:震災支援ネットワーク埼玉(SSN)、早稲田大学災害復興医療人類学研究所(WIMA)  
◆科研費基盤研究(B):原発事故被災者の移住・帰還・避難継続における新たな居住福祉に関する人間科学的研究  
◆協賛:WIMA研究所事務局(社内研究室内):〒359-1192 埼玉県所沢市三ツ島2-579-15  
(シブタケタケ事務局長(金 聖輔)) E-mail: shibutake@wima.or.jp  
(震災支援ネットワーク埼玉SSN事務局・金 聖輔) E-mail: dsks@431279.com

図1:シンポジウムポスター

祉学（平田）、発達行動学（根ヶ山）、臨床心理学（桂川・金）、教育心理学（桂川）、社会心理学（日高）、環境心理学（小島）、社会福祉学（多賀・増田・岩垣・猪股）、地域福祉学（増田）、精神保健福祉学（岩垣）、公衆衛生学（扇原・日高・岩垣）、社会学（多賀・辻内）、文化人類学（金・辻内）、法学・政治学（猪股）といったトランス・サイエンス（学際的・学融的）の観点から、未来を担う若者達の語りを傾聴し、対話を重ねてきた。

本研究チームがこれまで10年間に行ってきたシンポジウムでは、「今被災者にとって何が問題なのか？被災者をいかに支援すべきか？」というテーマを中心に、被災当事者の方たちと専門家が対等な位置関係で互いに学び合う機会を作ってきた。そのなかで、本シンポジウムの特記すべき点は、震災当時小学生であった若者の経験と考えから学ぼうとする新しい取り組みにある。

#### 4. 当日の講演およびパネルディスカッションの概要

早稲田大学人間総合研究センター所長の扇原より開会の挨拶があり、つづいて大会実行委員長の平田によるシンポジウムの企画趣旨の説明が行われた。

第1部は、福島県出身の被災当事者学生による講演と、それぞれの当事者に半年間かけてインタビューを続けてきた早稲田大学の学生達による「インタビューを通して学んだこと」についての発表が行われた。当事者学生は、鴨下全生（いわき市出身）、阿部ゆりか（福島市出身）、加藤裕美（福島市出身）、鶴沼はな（双葉町出身）、富塚悠吏（郡山市出身）の5名である。当事者の発表と、それを受けた早稲田学生の発表の後、コメンテーターとして本研究チームの教員・研究員が1名ずつ登壇した。

第2部は、災害社会学・環境社会学を専門とする関西学院大学社会学部教授・金菱清先生による基調講演『被災当時小学生だった若者との対話から私たちは何が学べるか』が行われた。金菱清先生は、2011年東日本大震災発生当時から、東北学院大学教養学部地域構想学科にて、被災当事者を含む学生たちと共に「東北学院大学・震災の記録プロジェクト」を続けてこられた。著作『3.11慟哭の記録：71人が体験した大津波・原発・巨大地震』（新曜社）は、第9回「出版梓会新聞社芸文化賞」を受賞され、その後も、『呼び覚まされる霊性の震災学：3.11生と死のはざままで』（2012）、『悲愛：あの日のあなたへ手紙をつづる』（2017）、『3.11霊性に抱かれて：魂と命の活かされ方』（2018）、『私の夢まで会いに来てくれた：3.11亡き人とのそれから』（2018）、『震災と行方不明：曖昧な喪失と受容の物語』（2020）、といった金菱ゼミナールの学生たちとの対話を通じて作成された、学生たちのフィールドワークやインタビュー調査を含めた著作を次々と世に出してきた。大規模授業においても、被災経験のない学生たちに被災体験を想像させ理解を深める新たな教育法を実践されてきている。

第3部は、当事者学生5名と、大会実行委委員長、基調講演者の金菱清先生、第4部講演者の萩原裕子先生、合計8名によるパネルディスカッションが行われた。原発事故後10年の経験の意味と意義を考え、若者達による日本社会・国際社会への提言について話し合われた。

第4部は、本シンポジウム共催の民間支援団体である震災支援ネットワーク埼玉（SSN）で心理相談チーム代表の臨床心理士・萩原裕子先生により『被災当事者の語りに耳を傾け学ぶことの意義』をテーマにした講演がなされた。

第5部では、本研究チームの顧問となる早稲田大学名誉教授・根ヶ山光一先生、そして震災支援ネットワーク埼玉（SSN）代表弁護士の猪股正先生による、シンポジウムの学術的意義と社会的意義についての講評が行われた。

#### おわりに

(1) 金菱清先生による基調講演、(2) 萩原裕子先生による講演、(3) 当事者学生達との対話、(4) 本シンポジウムの意義についての報告論文は、人間科学研究の本号と次号の2回に分けて掲載される予定である。東日本大震災および原発事故から10年が経ったいま、現在進行形のこの問題に改めて注目していただければ幸いである。

#### 参考文献等

##### [シンポジウム動画のYou Tube配信情報]

(1) 20211121 UPLAN【第1部】被災当事者学生と早稲田大学学生による講演

<https://youtu.be/cmlhntUNNRY>

- (2) 20211121 UPLAN【第2・3部】金菱清「現在大学生になる被災当事者との対話から私たちは何が学べるか」・パネルディスカッション

<https://www.youtube.com/watch?v=rwnGM-oEWH0>

- (3) 20211121 UPLAN【第4・5部】萩原裕子「被災当事者の語りに耳を傾け学ぶことの意義」・シンポジウムのまとめ  
<https://www.youtube.com/watch?v=Vq26iiL3K-g>

#### [本研究チームがこれまでにやってきたシンポジウム]

2011年7月『支援』のいまとこれから；避難所アリーナから地域へ（主催：SSN）

2012年3月「東日本大震災と人間科学：人間科学は東日本大震災に何ができるか？」（主催：早稲田人総研）

2012年4月「震災『支援』の今とこれから：支援から協働へ」（主催：SSN）

2013年3月「(第2回) 東日本大震災と人間科学：ポスト3.11の災害復興と環境問題を考える」（主催：早稲田人総研）

2013年7月「首都圏避難者の生活再建への道：大規模アンケートにみる避難者の声」（主催：SSN）

2014年11月「首都圏避難者の生活再建への道：これからの支援活動に求められる社会的ケア」（主催：とすねっと、共催：SSN,WIMA）

2015年2月「災害復興に向けた多面的ヴィジョンの創生①：公共人類学&社会福祉学」（主催：WIMA）

2015年6月「災害復興に向けた多面的ヴィジョンの創生②：社会医学&国際保健学」（主催：WIMA）

2015年12月「災害復興に向けた多面的ヴィジョンの創生③：発達行動学&政治学」（主催：WIMA）

2016年2月「首都圏避難者の生活再建への道：予想される分断と切り捨てに対する支援のあり方」（主催SSN、共催：とすねっと、WIMA）

2017年2月「首都圏避難者の孤立を防げ：交流広場同時開催」（主催：SSN、共催：WIMA）

2018年2月「首都圏避難者の孤立を防げ：交流広場同時開催」（主催：SSN、共催：WIMA）

#### [参考文献]

- 1) 辻内琢也（編著）：ガジュマル的支援のすすめ；一人ひとりのところに寄り添う [東日本大震災と人間科学①]。早稲田大学出版部，2013。
- 2) 早稲田大学・震災復興研究論集編集委員会（編）鎌田薫（監修）：震災後に考える；東日本大震災と向き合う92の分析と提言。早稲田大学出版部，2015。
- 3) 辻内琢也・増田和高（編著）：フクシマの医療人類学—原発事故・支援のフィールドワーク。遠見書房，ISBN 978-4-86616-080-1，2019。
- 4) Takuya TSUJIUCHI(Ed.): Human Science of Disaster Reconstruction: An interdisciplinary approach to holistic health following the Great East Japan Earthquake and Fukushima nuclear disaster. Interbooks, ISBN 4-978-924914-61-2, 2019.
- 5) Takuya TSUJIUCHI, Maya YAMAGUCHI, Kazutaka MASUDA, Marisa TSUCHIDA, Tadashi INOMATA, Hiroaki KUMANO, Yasushi KIKUCHI, Eugene F. AUGUSTERFER, Richard F. MOLLICA: High prevalence of post-traumatic stress symptoms in relation to social factors in affected population one year after the Fukushima nuclear disaster. PLoS ONE 11(3): e0151807. doi:10.1371/journal.pone.0151807, 2016.
- 6) Takuya TSUJIUCHI: Post-traumatic Stress Due to Structural Violence after Fukushima Disaster. Japan Forum: 2020, doi:10.1080/09555803.2018.1552308
- 7) 早稲田大学災害復興医療人類学研究所 (WIMA) : <https://wima.jp/>
- 8) 震災支援ネットワーク埼玉 (SSN) : <https://431279.com/>

## 現在大学生になる被災当事者との対話から私たちは何が学べるか

金菱 清<sup>a</sup>

What dialogue with the former disaster victims, now university students, teach us?

Kiyoshi Kanebishi

a. 関西学院大学社会学部 (*Faculty of Sociology, Kwansai Gakuin University*)

### Abstract

In this paper, I propose and summarize four issues on what we ponder and learn now from the dialogue with university students, former disaster victims. The following are the identified four cores.

- (1) Creativity appraisal (Time lag problem) : The appraisal of young people activism beyond dialogue, cannot be inferred from the current common perspective. There is a uniqueness, treasure in human experience, not reachable to be understood until the times come.
- (2) Remains of social isolation (Do we concern for all the voices?) : Equality and individuality are clues to attain the non-voiced voices. These values hints on how to rebuild empathy after a disaster.
- (3) Interviews limitation as a method (New potential methods discovered) : When investigating and recording the earthquake consequences, I came across many methods that did not rely on interviews or surpasses its limitation.
- (4) The dilemma of the shunned problems (Witness) : It is relatively easy to grasp behavior as a problem. However, it is difficult to recognize what is kept behind behavior and prevail. Such unraised problems as unveiled feelings/thoughts restraints are even unconscious as problems.

## はじめに

まずは、筆者が2012年に発刊した『3.11慟哭の記録』のなかから、東日本大震災から半年以内に書かれた学生の手記を一部紹介したい。

私は浪江町にあるゲームショップで友人と二人でショッピングを楽しんでいた。・・・心の奥で、家に帰る前まで原発が危ないのではないか？と想着いた。避難を試みるも祖父母が頑なに反対して避難することが出来なかった。祖父母は90歳を迎える超高齢者であり、祖父は足腰がしっかりしているものの、ボケが進行して30分前のことは忘れ、前立線の病気を患ってからトイレに頻繁に行き匂いがする。祖父は地震の事を忘れ何が起きているかわからず、トイレに何回も行っていた。祖母は自分たちが避難をすると、息子と孫、避難しているひとたちに迷惑がかかる、また何十年も住んだ土地を離れたくない思いから頑なに避難を拒否。『避難するくらいなら死んだほうがまし』。父がすまなそうに『本当にいざというときはお前だけでも一人遠くへ行かせる』と言われ、泣きそうだった

私と友人はボランティアをしに向かったのだが、なぜだか物凄い人数の大人が押し寄せてきた。『布団をくれる』と勘違いしたのであった。二度放送になった時、わざわざ段ボールのある位置まで来たのにもかかわらずほとんどの大人が帰って行った。結局残った人は数人、その数人の中にもボランティアと放送しているのにも関わらず手伝え先にももらえるだろうという考えの人がたくさんいて、もらえないとわかると途中で帰る人や、市の職員、先生方に暴言を言う人もいた。私は人間の奥底をみたような気がしてとても悲しくなった。物資不足のために盗難も多く発生していた。

母が外で洗濯物を干していたら、『(体育館に) 入れないでね!!』と怒られた。避難者は多いので避難者同士問題を起こすとすぐに広まってしまう。避難者全員車の中に洗濯物を室内の中や、車の中に干すようになる。

母は三月下旬にかけ訃報、行方不明者がまだ見つからない、それでの遺品、遺体、情報捜しで毎日ことあるごとに泣き、頭がおかしくなっていた。助けようにも私の痛みなんて誰にも分からないと言い相手にしてもらえなかった。見守るしかなかった。これがこの先ずっと続く。

私の父は原発のせいでは仕事を失った(5月8日父が仕事場から解雇)。私は『福島第一原子力発電所の事故による人員削減のために解雇する』という解雇通知書を見せられた時は本当に東電を憎んだ。

私たちのスクリーニングが終わったために物のスクリーニングを見守る。次から出てくる服やお皿。きっとこんなものを取りにわざわざ一時帰宅するのかわかっているだろう。逆の立場だったら私は絶対に思っただろう。スクリーニングにプライバシーなんてものはまるでない。恥ずかしくて母も見ていることが出来ない。

大学のある仙台のアパートに着いたのは午後十時ごろ。途中の地下鉄では汗臭さからかじろじろと私を見て不快な顔をする。もし仙台に原発があつてこんな風になったらどうするのか。誰が恥ずかしいと思うものか。恥ずかしいと思っていたら帰ることなんて一生出来ない。

(2011.9.11脱稿 山本祐一「原発避難・捜索・警戒区域」『3.11慟哭の記録』より)

以上の手記は当時高校生だった大学生が書いたものであるが、原発事故後次第に追い詰められていく様子が詳細に描かれている。

本報告では、『現在大学生になる被災当事者との対話から私たちは何が学べるか』について四つの論点を整理して述べたいと思う。(1) 創造的価値 (Timeの問題)、(2) 社会的孤立 (聲 (声) を聞こえるのか)、(3) インタビューの限界 (発展可能性)、(4) 問題にならないことの問題化 (当事者性とは) である。

## 1. 創造的価値 (Timeの問題)

若者の対話以上の参画を考えた時、今の価値では推し量れない点である。そこには、人に理解されないゆに「ユニーク」さがある。東北の童話作家の宮沢賢治の作品に、あまり知られていないが『虔十公園林』という物語がある。虔十 (けんじゅう) は文字通り、賢治の名前をなぞった主人公である。虔十は、おかしくもないのに笑ってばかりいて、知恵が足りないと馬鹿にされていた。「雨の中の青い藪をみては喜んで目をぱちぱちさせ、青空をどこま

でも翔けていく鷹を見つけては、はね上がって手をたたいてみんなに知らせる」ことをしている。嬉しさの「笑い」を振りまいているが、これは通常の人間に閉じられた侮蔑的感情である嘲笑の「笑い」とは対極にある。いわば、自然に開かれた審美的感性で彩られている。額に汗してあくせく金を儲けたり名誉や地位を得たりする人からすれば、虔十の生き方は一見何の価値もない人間のようにみえる。

ある日虔十は親に向かって「杉の苗700本を買ってけろ」と懇願する。そして親も不思議に思いながら、家裏の野原に植樹をする。当時、行為の意味は誰もできなかった。隣人から反対や暴力や地質で伸びない、「馬鹿は馬鹿なんだ」とどやされる。

しかし、この裏庭は、まず子供たちの遊びになった。そして、時がたち、駅ができ、周囲に工場や家が建ち、都市のなかの唯一の緑として残った。そこでようやく価値に気づいた大人は、「虔十公園」を残すことを決めたのである。これはその時は分からないが、子どもたちの感性に開かれた創造的価値なのであろう。随分時間が経過して、その価値は後から与えられる。花巻市立桜台小学校の石碑には、「ああ、全くたれがかしこくたれが賢くないかはわかりません」と刻まれている。

筆者は今回の震災で学生の手持っているものすごい力に魅了されている。それはあたかも映画の『君の名は。』を彷彿とさせるものである。田舎暮らしの女性が都会暮らしの男性に憧れて話が進んでいく。筆者の前任校でも不思議なことが起こり、偏差値70以上の現役東大生が、偏差値30台の地方学生に会いに来るようなことが起こった。逆なら理解できる。女子学生は男子のフィールドワークでのフットワークの軽さに驚愕して、他方男子学生は女子大生のメモ書きをみて整理されている様子に感嘆していた。

筆者らが2016年に出した『呼び覚まされる霊性の震災学』では、全て学生が3年生の時に書いた論考であるが、なかでも幽霊の論文は、東大の流言飛語の専門家でさえ腰を抜かしたというほど衝撃を与えるものとなっている。

ここでは、女子学生が集めたタクシードライバーの方の体験談をふたつだけ具体的に紹介したい（金菱編, 2016）。

一つ目はS.K.さんという56歳の男性のドライバーの方である。S.K.さんは、震災から3か月くらいたったある日の深夜、石巻駅周辺で利用客を探して乗車を待っていると、初夏なのにもかかわらず、ファーのついたコートを着た30代くらいの女性が乗車してきた。目的地を尋ねると、「南浜まで」との返答。その当時、南浜はほとんどが更地であった。それを不審に思ったS.K.さんは「あそこはもうほとんど更地ですけど構いませんか？ どうして南浜まで？ コートは熱くないですか？」と女性に尋ねたところ、「私は死んだのですか？」と震えた声で応えてきたため、驚いたS.K.さんが「え？」とミラーから後部座席に目をやると、そこには誰も座っていなかった。

二つ目はK.H.さんという57歳の男性のドライバーの方である。震災から3年後の2014年6月のある日の正午の回送中、手を挙げている人を発見してタクシーをとめると、マスクをした男性が乗車してきて、服装や声からは青年といた年恰好であった。K.H.さんは「でもねえ、格好が何でかね、冬の格好だったんだよ」と振り返る。初夏の6月に、その青年は真冬のダッフルコートに身を包んでいた。K.H.さんが目的地を尋ねると、青年は「彼女は元気だろうか？」と応えてきたので、もしかすると知り合いだったかなと思いつきながら「どこかでお会いしたことはありませんか？」と聞き返すと、「彼女は…」といい、気づくとその青年の姿はそこにはなく、青年が座っていたところには、リボンの付いた小さな箱が置かれていた。K.H.さんは、未だにその箱を開けることなく、その青年の彼女へのプレゼントだと思われるそれを、常にタクシーの中で保管している。

ここにはあってもおかしくはないのではないかと思わせる何かがある。つまりは、タクシーにおける幽霊現象の「リアリティ」を支えるものとは一体何なのか。それは、例えば、①対象との具体的な会話や接触といったコミュニケーション、②実車へとメータを切ることや運賃の肩代わり、③運転日報や自身の日記、④位置情報を示すGPS、実車や配車の無線、⑤K.H.さんの体験談のような残されたプレゼントの箱などが、幽霊話である幽霊譚に対して「リアリティ」を持たせていると考えられる。

もちろん霊を実体として捉えることには批判があるが、タクシードライバーたち自身が、この幽霊現象をどのように受け止めていたのかということは明らかにできると考えられる。つまり、幽霊に対して肯定的・好意的だったのか。それとも否定的・嫌悪的な位置づけだったのか。先ほどのドライバーは次のように考えている。

S.K.さんは、「最初はただただ怖く、しばらくその場から動けなかった」、「でも、今となっちゃ別に不思議なこと

じゃないな〜。東日本大震災でたくさんの方が亡くなったじゃない？この世に未練がある人だっただけで当然なもの。あれはきっと、そうだったんだろうな〜。今はもう恐怖心なんてものはないね。また同じように季節外れの冬服を着た人がタクシーを待っていることがあっても乗せるし、普通のお客さんと同じ扱いをするよ」と微笑んでいた。ちなみに、このS.K.さんは、震災で娘さんを亡くしている。

K.H.さんは、「ちょっとした噂では聞いていたし、その時は『まあ、あっても可笑しなことではない』と、震災があったしなあと思っていただけ、実際に自分が身をもってこの体験をするとは思っていなかったよ。さすがに驚いた。それでも、これからも手を挙げてタクシーを待っている人がいたら乗せるし、例えまた同じようなことがあっても、途中で降ろしたりなんてことはしないよ」いつか、青年にこのプレゼントを返してあげたいと考えている。K.H.さんは、震災でお母さんを亡くしている。

二人のドライバーは、①いずれの場合でも、肯定的かつ好意的で、霊現象の特異性というよりも、むしろドライバーたちがどのように恐怖心ではない形で、この霊現象を温かい形で受け入れているのかということがポイントになる。

亡くなった人々に対して、この世に未練があったとしても当然であると受け入れて、また同じような季節外れの現象があったとしても、普通のお客さんと同じような扱いをするだろうと述べていることから、霊現象の体験当初はどうしても怯えていたドライバーたち自身が、次第に霊を受け入れていって、②「畏敬の念」を持つようになったといえる。そして、まだ無念の想いを抱いて、直接指定した行き先へと行ってもらえるタクシーに乗り込んで、③やり切れない気持ちを伝えることができる媒体として、個室の空間であるタクシーを選んだのではないかというドライバーの解釈もある。

もちろんこれらのタクシードライバーは個別具体的で、氏名もこちらでは把握しているが、あえてイニシャルで示している。それは本人が希望しているからである。もしこれが誰でもひけらかすような人であれば、幽霊の話を面白おかしく宣伝したいのかと思ってしまい、その人の証言を信じることは難しいが、どのケースの場合も逆である。

つまり、このような幽霊話は、「匿名」とすることを条件に初めて聞き手である話者に対して打ち明けられる。なぜなら、秘匿について「体験直後は誰かに話したくてしかたなかったけれども、今はしまっておくと決めているんだ。周りから嘘だと言われて彼らの存在を否定されてしまうから」という証言があるように、匿名を条件にすることによって、死者の尊厳を維持することにもつながるからである。このことから、礼節をもって幽霊に接していることで、幽霊自体が危害を加えたり恨みを持ったりするという恐ろしい存在から、静寂な気持ちで無念の気持ちを掬い取ることができる「イタコ」的な存在として、タクシードライバーたち自身を位置付けられるということを示している。

学生が調査をした価値は、既存のアプローチと異なって、怖く祟るような幽霊から不成仏なので供養する図式ではなく、どこか優しい幽霊観を導き出したのである。研究者ならば、多くの知識はあるがどうしてもそのアプローチを持ち出し当てはめようとするが、学生たちは現地で起こっている事象について素直にデータを拾いあげてくる凄さがある。すなわち、現場ですでに答えが示されているにもかかわらず、それを既知の学問観が邪魔をして見えにくくしてしまっている現実があることを学生から教わったのである。創造的価値は学生にこそ開かれているのであると実感させられた。

## 2. 社会的孤立（聲(声)を聞こえるのか)

二つめは、社会的孤立である。筆者のあるゼミ生は福島県浪江町出身で、彼女の父親が原発と津波でいまでも行方不明である。その学生と向き合った時に、彼女は涙を溜めながら「私のお父さんは、震災でいまだ行方不明だけれども、果たして本当に亡くなったのだろうか、他の行方不明者家族も私と同じような思いを持っているのか知りたい」と語った。筆者は答えに窮してしまった。誰しもが思うかもしれない。もう10年近くも（遺体が）見つかっていないのだから亡くなったのだろうと……。しかし、当事者である行方不明者遺族は、死の定点が判然とせず、薄っすらそうだろうなとたと思っていたとしても、亡くなったことを断定するための証拠は何ひとつできていないのである。

この社会的孤立を考えなければならなかったきっかけは、津波で父母を亡くされた女性と出会ったことである。彼女は、一番苦しいのが「社会的孤立」であると訴えていた。カウンセリングに通っても、15分の傾聴で帰される。無



気力に苛まれ、買い物はおろか一歩も家の外に出ない。食べて排泄し夜か朝かわからない状態で、処方された睡眠導入剤をワインで流し込み、無理やり寝ていた。それにもかかわらず、彼女は「私は被災者ではないのか」と怒りや疑問をぶつけていた。

彼女は宮城県塩竈市のマンションに住んでいたのが、被災は地震で家具が倒れた程度であった。しかし、津波被災地の仮設住宅には、多くの物資や芸能人の慰問、ボランティアの資源の投入、報道などが殺到し、両親を亡くしているにもかかわらず災害情報も来ないし、NPO的な外部的な支援もお子さんを亡くされたご遺族に集中した。その状況について、「被災地に住んでいないけれども私は被災者ではないのか。普通のおばさんは支援の対象外なのか」という怒りが心の底から湧いてきていた。この普通のおばさんを今回のテーマである福島の学生に当てはめたとき、大人ではない経験の未熟さゆえにスルーされている可能性も多いにあるだろう。

社会的孤立とは、声も出せない人の存在をさし、世間からも無視され自分も黙している状況をさす。震災では多くの方がホットスポットとして脚光を浴びた。それは代表性を持つ人々である。例えば女性の場合では、11人亡くした遺族に対して2人は少ないとみなされ、代表性を持たない被災者として扱われる。

しかし、彼女は「あの時の辛い体験は、死んだ人の内訳や数ではない、被災した／しないも関係ない」と訴える。それはいわば、コールドスポットなのである（金菱編, 2016）。「災害とはその人が生きてきたなかで一番MAX（最大限）の不幸を経験していて、11人を亡くした経験は私にはない」という点から捉えれば、災害における平等性と個別（経験）性の保証がされてはじめて、共感の作法が生まれると言える。この事例は、声にならない声をどのように見つけ出すのかについてヒントを与えてくれているように思う。

### 3. インタビューの限界（発展可能性）

三つめに、インタビューの限界およびその発展可能性について論じたい。被災の当事者性に迫るものとして主にインタビューがある。数値で推し量る計量やアンケートに対して、質的な中身を問うものがインタビューの醍醐味でもある。しかし、震災を調査したり記録を採ったりするなかで、必ずしもインタビューに頼らない方法あるいはインタビューの限界を感じざるをえない場面に数多く出くわすことになる。

2016年に、今度は手紙という形で当事者が綴るプロジェクトを立ち上げた。そして、その手紙を読んだ時、筆者は愕然とした。これまで20年ほど聴き取りの手段を用いて対象に迫ってきたが、たとえば亡くなった遺族がその故人の不在そのものを哀しむのではないことに気づかされた。その手紙には、日常生活に深く、しかもあまりにもそこに溶け込んでしまい当たり前を送ってきた生活世界を営めなくなる辛さが描かれていた。それが、毎日ご遺族が抱えている向き合い方であった。たとえそれについて聴き取りで話を伺ったとしても、ひよっとするとスルーしてしまう事象が書かれてあったのである。

インタビューや聴き取りはいくら双方向の創造的コミュニケーションの産物だという自己方便はなりたつたとしても、いかに聴き取る側のアジェンダセッティング（問題設定）に暗黙の裡に絡めとられるのかということが見えてくる。たとえ長年聴き取ったり会話をしたりしても見えてこない大切な世界がこれだけあるのだということを思い知らされた。逆に言えば、手紙を通して見る世界は、何が大切なのかということを瞬時に把握する手段としては調査方法としては適しているのかもしれないことが見えてきた。

もちろん筆者も含めて研究者、マスコミ、映像、記録でも、この奥深さで震災を日常生活に溶け込んだものとして描けていない。すると、当然被災者や遺族のなかから、「あなたに言ってもわからないし、理解されない」という反応が暗黙の裡に含んでいる可能性は否定できない。

さらに、その5年後の2021年に、当事者が10年前の自分に手紙を綴るプロジェクト『永訣』を立ち上げた。まずはそのなかから紹介したい。当時4年生の自分に向けた手紙である。

十年前の私、あなたは同じことの繰り返しのような日々を過ごし、少し退屈な小学校生活を送っているかもしれません。特に何も無い日々。しかしそれはとてもかけがえのない、そして普通ではないことだとすぐにあなたは理解するでしょう。

2011年3月11日にあなたの人生は大きく変わります。信じられないかもしれませんが、その年、その日に大地震が起り、津波が発生し、その津波が街を、建物を、そしてたくさんの人までもを一瞬で飲み込んでしまいます。そのたくさんの人の中に、あなたのお父さんが含まれています。

・・・せめてこれだけは3月11日の朝、お父さんに伝えてください。

「朝ごはんの目玉焼き、今までで一番おいしかったよ。行ってきます」

(目黒紹「父の決断を尊重し続けていきたい」『永訣』より)

この手紙には、信じられないことが起こることを、一番わかっているはずの自分に伝えることの難しさと創意工夫が込められている。そして、通常毎日の朝食がスルーされているけれども、あの日の目玉焼きの姿を思い出して、その日常がかけがえのないものとして描かれている。これはおそらくインタビューではでてこないし、たとえ当事者が応えていてもインタビューが無視をするぐらい当たり前の日常風景なのである。

ここから、当時小中学生だった福島出身の学生の手紙を三つほど取り上げることにする。一人目は福島県国見町の当時小学4年生の学生さんである。

大きな出来事を経験したからといって、あなたの日常が変わるということはありません。変わらないからこそ、あなたに忘れて欲しくないことを伝えたいと思います。

体に悪影響のある放射線が広がって、検査などを行ったと言いましたね。検査結果は全然問題ないので安心してください。しかし、この放射線の影響で避けられるようになる可能性があることを先生に教わりました。そして、あなた自身福島県から来たと言っただけで、今まで話していた人が急に離れていくというを経験します。その時は本当に悲しかったのですが、それは気にしたら負けなので乗り切ってください。

(佐藤雪音「当たり前を過ごす私に忘れて欲しくないこと」『永訣』より)

二人目は福島県浪江町の当時中学2年生の学生さんの手紙である。

地震のせいでおきた津波と原発の事故で私はもう家に帰ることは出来なくなります。故郷は津波でもうあなたにとって当たり前の景色は二度と見る事ができません。

これがあなたの10年始まりです。私がここに書くことで後悔ない生き方を出来ていたならとアドバイスというより、私に対しての悪口と感じた不満を書かせてください。

お父さんがいなくなって何を恨めばいいのか分かりませんでした。津波?原発?でも恨んでも帰ってきません。帰ってこないお父さんを恨んだこともあります。

でも今お父さんが帰ってきたら死んだってことになるんだろうね。私は年月が経つと共にお父さんが帰ってこないことを願っています。本当になってほしくないからかな。あと絶対に聞いた瞬間泣いちゃうから。今も変わらずすぐ泣きます。でも家族の前では絶対に泣きたくないです。

あなたが私にならないように。

(新野夢乃「後悔しない生き方を」『永訣』より)

最後は福島県郡山市の当時小学2年生の手紙である。

ミーには想像もつかないだろうけど、今のミーは仙台に住んでいるんだよ。

…放射能ってなんか紫色のオーラを感じるんだけど、実際見えないし。何の答えも出ないしどう付き合っていくか…マスクはつけなくても良くなるし、スカートもそのうち履けるようになるよ。福島はこれからフクシマって言われるようになります。

…原発が爆発したせいで、ちよっぴり変な普通が福島に浸透することになります。町の至る所にモニタリングポス

トっていうハイテク百葉箱みたいのができて、甲状腺の検査も時々行われるようになります(ぬるぬるするやつ)。あと、今みーは放射線バッジ欲しいなーって思ってるだろうけど、あれ、めっちゃめんどいよ。毎日日記見たいの書かなきゃいけないし(真面目に書いてなかったけど)ちゃんと持ち歩かなきゃいけないし。側溝の上は今はまだ歩かないほうがいいなあ。7年後くらいに、除染をしてるところで、うん、低そうって思って初めて側溝の上を歩いた時はなんだかちょっと悪いことをしている気になったよ(笑)。

3年生になって、みーは山形に引っ越します。母子避難っていうの。なんかめっちゃおかん感あるよね。

(中村天海「みーへ。あなたのままでいい」『永訣』より)

以上三つの手紙は、自分に対して半分他者化させながら語りかけている。最後の世界は側溝が安全となったが、ずっとそこを避けて通っていたことで、罪意識を感じているシーンであるが、もしインタビューする側がこの世界観を知らなければ質問しようがないし、子どもなりの視点で目を落とした時に大人の世界と見える位相が異なるのだということ伝えてる。すぐに福島の大きな問題である原発やエネルギー問題などに飛ぶのではなく、その人なりの世界から見ることの重要性を今一度確認しておく必要があるだろう。

#### 4. 問題にならないことの問題化(当事者性とは)

四つめに、当事者のことは当事者が一番わかっているという前提になって問題を立て過ぎることの課題である。文化人類学者のリントンは「深海に棲む魚は、おそらく最後まで水というものに気づかないだろうという。何かの偶然が水面に運び、大気に触れさせない限り、彼は水というものの存在を意識しないであろう」と述べている。

東日本大震災で当時小学生だった人は、その後の人生の歩みとしてそれが当たり前の所与のものとして体得してしまっているために、周りの人が問題だと思っても、気づかない。その結果問題行動として認知されにくい側面を持つ。すなわち、ある問題は問題があるから問題なのではなく、問題がないことが問題となりえることを指している。筆者は、東日本大震災で当時小学生だった大学生が“妙に”出来上がっていることが気になっていた。行儀がよく、気配りのできる子であった。それが筆者の眼にはませているように思えてしかたなかった。ある時、彼の語り部活動を現地で聞いた帰りの道中で、そのことを彼自身に問いかけてみた。「ひょっとして反抗期がなかったんじゃない？」という問いかけに対して、即答で「そうだ」と答えた。なぜそのようなことを聞くのかきよんとしていたが、よくよく聞いていくと過剰なまでに反抗期がないように配慮されていることに気づかされた。感情管理が実に行き届いていた。

快活に外では語り部活動など震災の教訓など話しているにもかかわらず、家のなかでは震災の「し」さえ口に出さない。そしてその環境をある種当たり前として受け止めていた。このことは彼の特殊性だけではなく、ある程度集団や地域としてくくれることがわかってきた。当時のその学校は震災以降、いわゆる「荒れて」いなかったのである。震災前は、県内のなかでも荒れていることが定説化した学校である。このことは社会側からみれば、荒れていないので、問題はなかったことになる。しかし、問題としてあがってこないことに、震災の根深さがあるのだと筆者は思った。育った環境でそれが当たり前だと思ってしまうと、社会はそういうものだという認識が共有化されてしまうのかもしれない。荒れない学校や使われない保健室が常態化することは、一見“良い”ふうに社会には映ってしまう。

彼は、水から飛び出して水を感知し、同級生に聞き始めると、次のようなことがわかってきた。友人のKさんは震災後、もっとも変化したのは家族との関係だと語ったのである。たとえば、「変化と言っても仲が悪くなったり、家族構成が変わったりしたわけではありません。今まで通りの家族に戻りたい、その一心で今まで通りの自分を演じてきたんです」という言葉がある。

学校での辛い出来事や自身の被災体験を家族が知ること、家庭という場所に自分の居場所がなくなることを最も恐れたという。そのため、被災した体験を家族と共有することはなく、自身の心のなかに押しとどめ続ける“避難行動”を行った。いつしかこの“行動”は日常のこととなり、震災から時間が経つにつれて徐々に意識することもなくなっていくのである。

問題行動を問題として捉えることは比較的捉えやすいが、問題でない行動それすら意識されないものを問題として

把握することがいかに難しいのかということがこの言質からは窺える。演じたり、仮面を被ったりすることがいつしか実相となり血肉となる現実を私たちはどのように被災地から括り、見えにくい、あるいは見ようとしない問題としての「問い」に転換できるのかが重要である。当事者の声に耳を傾けることが「寄り添い」であるとするならば、当事者も意識すらしていないが「問題がある」ことに注視するのが「より深い寄り添い」だと言える。

以上四つの観点から見てきたが、原発問題の課題は、問題すら明らかになっていないなかで、まだスタートラインにさえ立てていないのかもしれない。しかし、子どもたちの世界を通して、創造的に考えることもヒントとして開くこともできるのではないかと考えられる。

#### 参考文献

金菱清編, 2012, 『3.11慟哭の記録－71人が体感した大津波・原発・巨大地震』新曜社

金菱清編, 2016, 『呼び覚まされる霊性の震災学－3.11生と死のはざままで』新曜社

金菱清編, 2021, 『永訣－あの日のわたしへ手紙をつづる』新曜社

雁部那由多, 2020, 「震災の記憶と感情の行方不明－失われた記憶と家族関係」金菱清ゼミナル編『震災と行方不明－曖昧な喪失と受容の物語』新曜社：pp76-92

## 被災当事者の語りに耳を傾け学ぶことの意義

萩原 裕子<sup>a,b</sup>、中川 博之<sup>a,b</sup>、愛甲 裕<sup>a,b</sup>、猪股 正<sup>a,b</sup>、辻内 琢也<sup>a,b,c</sup>

### The Importance of Listening and Learning from the Narrative of Survivors

Yuko Hagiwara, Hiroyuki Nakagawa, Yutaka Aiko, Tadashi Inomata, Takuya Tsujiuchi

- a. 震災支援ネットワーク埼玉 (SSN) (*Shinsai Shien Network Saitama*)
- b. 早稲田大学災害復興医療人類学研究所 (*Waseda Institute of Medical Anthropology on Disaster Reconstruction*)
- c. 早稲田大学人間科学学術院 (*Faculty of Human Sciences, Waseda University*)

#### Abstract

The Great East Japan Earthquake and the following nuclear disaster on 11th March 2011 caused many refugees and people were left with no choice but to evacuate from their long-lived homeland, Fukushima.

To support these people, 'Shinsai Shien Network Saitama' (SSN) has been launched by professionals from multiple fields such as lawyers, judicial scriveners, medical doctors, social workers, clinical psychologists, and IT specialists. And they gathered in Saitama Super Arena, the temporal evacuation site. Since then, we have been working together interdisciplinarily to realize the 'wholistic social care' for more than 10 years.

This report introduced narratives of the survivors of Fukushima disasters who the author had encountered through the work of psychological counselling team. With their actual narratives, the paper discussed about how they have been losing their connections not only to their hometowns, but also to local people around, and consequently to the self, and how their flow of times and lives were forcibly cut off. With the focus on themes around 'the importance of talking the untalkable in speaker's own pace' and 'retrieving the "life in Fukushima" they left at the place', it investigated on the meaning of the survivors speaking out their feelings they have been carrying, and their reflections on their own lives, as well as the meaning of listening to their stories.

It can be said that since the nuclear disasters, Fukushima people had been forced to continue their lives in shelters with complex feelings and thoughts, living with the reality that constantly demands them hard decisions and compromises. What their narratives reveal is their lives, their stances, and their extraordinary experiences which makes their lives. The relationship emerges from 'talking' and 'active listening' can be something beyond the simple dynamic of the supporter and the supported. As a one who also live in this time, the author hopes to continue the work of SSN, and to be listening to each unique stories of Fukushima people's lives.

## はじめに

筆者は震災支援ネットワーク埼玉SSN（以下、SSN）の心理相談チームの一員として、2011年3月11日の東日本大震災以降、原子力発電所事故（以下、原発事故）による被害から逃れるために、住み慣れた土地からの避難を余儀なくされた福島の方々とのかかわりを続けてきた。

原発事故から10年が経ち、日本に住む多くの人たちの記憶が薄れ、風化していくなか、本シンポジウムにおいて、原発事故当時小学生だった若者たちとの対話を実現したことは、非常に意義のあることである。この世代の方々の語りは、震災支援を継続してきた者たちにとって聴く機会のなかった、さらに言えば聴こうとしてこなかったものであり、さまざまな経験を抱えながら、彼らが深く考え、生き抜いてきたことを痛切に感じる機会となった。

当時小学生だった、そして現在大学生となった彼らから受け取ったものをしっかりと抱えながら、本報告では、我々SSNの活動を紹介するとともに、被災当事者である福島の方々の実際の語りとともに、その語りに耳を傾け学ぶことの意義について考えてゆきたい。

## 1. SSNの活動について

SSNは、2011年3月に、弁護士、司法書士、医師、社会福祉士、臨床心理士、ITスペシャリストなどの専門職がさいたまスーパーアリーナに集まり、支援活動を行ったことから始まった。避難所において「なんでも相談」や「情報検索コーナー」の設置を行い、双葉町民による「ボランティアカフェ」、埼玉県内各地に避難されている方々が集まれる場所を提供する「つながるカフェ」など、現在も交流会活動を行っている。また、2012年以降、避難中の方を対象に「避難者状況調査」を行い、その結果を分析し、よりよい支援活動につなげられるよう行政やNPOと共有したり、国に提言を行ったりしている。この調査は、こころの状態についての質問に加え、その関連要因として考えられる社会的、経済的な問題を多角的にとらえられるような質問で構成されており、回答者の希望に応じて各分野の専門家により電話・訪問による相談対応も行っている。

辻内（2012）によれば、原発事故により避難している方の精神的苦痛を解決するためには、その原因である、仕事や生活費の問題、近隣関係の希薄化、コミュニティの断裂に対処する様々な「社会的ケア」が必要であるという。その社会的ケアの実現のために、①社会経済的な問題を解決すること（弁護士・司法書士）、②こころとからだを支えること（医師・臨床心理士）、③生活・情報を支えること（社会福祉士・ITスペシャリスト）を柱として、多職種連携のチームで活動を続けている。

臨床心理学の専門性を有している筆者は「こころとからだを支えること」を心がけ、緊急・初期支援として、さいたまスーパーアリーナにおけるPFA（Psychological First Aid ;心理的応急処置）を意識した活動、「なんでも相談」の受付業務、支援者の方々への研修、さらに中・長期的支援として、ボランティアカフェや交流会のお手伝い、避難者状況調査などを通してつながったの方々への訪問、電話での相談の継続を行ってきた。

## 2. 被災当事者の語りとともに過ごした10年間

この10年に渡る活動を通して、被災当事者の方々に対して感じていることは、「原発事故さえ起きなければ、あの福島の豊かな土地で穏やかに暮らしていた人々」ということである。もちろん、福島においても様々な出来事が起こったと思われるが、地縁、血縁に守られながら、折り合いをつけて生きていたはずであろう。だからこそ、支援においては「社会的ケア」の視点を常に持ちながら、その方が持っていた力、本来の強さを取り戻していくことを念頭においてきた。

ここで、1人の被災当事者の語りを紹介しながら、論を進めてゆくこととする。手塚文子さん（本人の希望により、実名で記載）は、福島県いわき市から避難されており、「避難者状況調査」の相談対応をきっかけに出会った70代の女性である。手塚さんは、のびやかな声で元気に話す明るい方であったが、その一方で、突然その地を離れなくてはならなかった悔しさ、本意ではない場所で生きていく悲しさをこめて、いつもふるさとの話を筆者に聴かせてくださった。手塚さんは原発事故、そしてその後の避難生活を振り返る中で『あの時』を境に、大きく人生が変わってしまった」と表現した。

原発事故による避難により、被災当事者の方々はそれまで住んでいた地域を離れることを余儀なくされた。ふるさとを喪失するということは、家族、友人、学校に集う人々、職場の人々、ご近所の人々、地域の人々にひろがる、さまざまな人とのつながりを失うということであり、それらの人間関係を通して形作っていた「自分らしさ」さえも失ってゆくことにつながる恐れもある。

さらに、それまで連綿とつながっていた時間の流れを、無理やり区切られ、終わりにされ、引き離されることにもなる。その時間の流れの中には、福島の大い、かけがえのない自然への想い、そこに集う人とのつながりとともに、そこで暮らしてきた豊かな過去、そこで暮らしていくはずであった穏やかな未来が存在していたはずである。

### 3. 語る意義と、語りに耳を傾ける意義

#### 3-1. 誰にも話せなかったことを、その方のペースで語ってもらおうこと

被災当事者の方々とお話ししていると、「自分よりも大変な状況の方々がいる」という他者を思い遣る言葉と共に、ご自身のつらさを表現されない、控えめな方が多いように感じる。しかし、「他にもっとつらい人がいる」ことと、「自分がつらいと感じている」ことは全く別のことである。また、避難先で心ない言葉をかけられて、ご自分の気持ちを表現することを控えるようになったり、さらに「つらいと感じることはいけない」と思うようになったりする方もいる。もちろん、無理に話す、話させることはあってはならないが、ご自分なりのつらさを抱えた方々が、話したい、と思ったときに安心して話せる場が必要であると筆者は感じている。

震災以降のつらさを語ってくださった手塚さんは、そのことを以下のように表現した。

震災以降のこと、すべてをあれもこれもととりとめもなく話してしまいました。吸い取り紙のごとく優しい笑顔で聴いてくださり、頷いてくださり…。心地よく私の重荷を下ろしてくださったのですね。感謝の気持ちでいっぱいです。

原発事故以来、被災当事者の方々は、避難させられること、賠償のこと、帰還のことなどあらゆることを、いつも国や東京電力のペースで決められてきた。せめて語りに耳を傾ける場だけでもその方のペースで進めていただき、たくさんの方の不条理を抱えながら、不本意ななか選択せざるをえなかった気持ち、悔しさや怒り、悲しさややるせなさ、さまざまな想いを受けとめることが大切であろう。

蟻塚 (2016) は震災トラウマを乗り越えるために必要なこととして、「SOSの能力」、「悲しむ能力」、「語れる相手の存在」を挙げている。「SOSの能力」は、他人に相談することであり、対人的な信頼感がこころの基礎にないとSOSを発信することができないという。さらに、つらいことも受け入れて心を投げ出して悲しみに身を任せることのできる度量を「悲しむ能力」と表現し、悲しむことができるということは、その人の能力の大きさを示しているという。そして、それらのことを「語れる相手の存在」が必要であると指摘している。

今まで誰にも話せなかった、被災当事者の方々の「自分だけの3.11の体験」にひたすらよりそい、ともに悲しむことで、少しだけでもつらさが和らぎ、我々 SSNが「何でも口に出して話せる」、「頼っていいと思える」存在になっていければと願っている。

#### 3-2. 置き去りにしてきた「福島での人生」を取り戻していただく

さらに、原発事故を通して「大きく人生が変わってしまった」と感じていた手塚さんに対して、筆者は原発事故以前のお話、福島でどのように生きてきたのかについても耳を傾けた。

もう、震災のことはあきらめよう、切ろうと、ふたをしていたような気がします。そうすることで、前に進もうとしていました。でも、子どもの頃からのこと、子育てのさなかのことまでも聴いてもらって…、改めて、振り返ることができました。

そうすると、そんなに悪い人生じゃなかったって。大変な時も楽しんで乗り切ってきたり、いろんな人に出会えて、

支えてもらったり。ああ、こういう人生だったんだなって。

手塚さんは、ご自身の人生を振り返り、語ってくださることで、切ろう、ふたをしようとしていた人生の流れを取り戻したのではないだろうか。このことは、野村 (2013) が「人生を一連の継続する様々な体験のつながりとみること、自らを振り返ることなしには成り立たない」と指摘している通りだと考えられる。SSNの活動の中では、その方を取り巻く環境をアセスメントし、必要な支援につないでいく、いわば「外部につなげる支援」が最も重要であるが、筆者はその方の「内面をつなげてゆく支援」も行っていければ、と考えている。

#### 4. 被災当事者である福島の方々の語りに耳を傾け、学ぶことの意義

本報告のテーマについて、さらに手塚さんの言葉を共有しながら考えていきたい。区域外避難とみなされる手塚さんは、東京電力へ賠償を求める裁判を起こそうと考え、その方向でSSNでもサポートを始めていた。しかし、さまざまな事情で難しいということになり、裁判をあきらめる、という決断をすることになった時に、このように語った。

これは、運命なんだろう。なんて運が悪いんだろう。

本当に、私、何か悪いことしたんだろうか。

繰り返し、繰り返し、そんなことを思いながらも、どこかでこんな想いも湧き上がる。

もう、残りの人生を何かを恨むことに使いたくない。恨む気持ち、嫌な気持ち、ずるずる引きずってたら、これから何年生きるのがわからないのに楽しめない。

私のことを受けとめてくれて、私のために動いてくれて、今も何かと気にかけてくれる人たちと巡り合えたこと、それだけでもういいじゃないかって。

悔しいけど、これが運命なんだ。だから、もう忘れよう。切り捨てよう。

どんな状況でも、楽しいこと探して、笑って生きよう。

一人の人がとことん苦しんだ末に、このような思いを持つに至った場に立ち会えたことは、筆者にとって大切な体験、人生の糧となった。今回は手塚さんの言葉を共有していったが、たくさんの被災当事者の方々とのかかわりの中で、何度もこのような機会をいただいている。そして、たくさんの想いを受け取り、人間としての学びを深めている。

この「あきらめ」という言葉には、デーケン (2003) の指摘する通り「自分の置かれた状況を、『あきらめ』に見つめて受け入れ、つらい現実にも勇気をもって直面しようとする」ニュアンスが含まれており、英語でのgiving it upではない、making it clear (明らめ) に近いと捉えることができる。倉光 (2000) は、自身の臨床の経験を通して、非常に深刻であったり、取り返しのつかない事態によって生じたりした「心の傷」を抱えている場合に、人は怒りや悲しみの時期を経て、この「あきらめ」の境地に至るとした。

原発事故により、被災当事者の方々はたくさんの分断や選択、「あきらめ」を余儀なくされてきた。お話に耳を傾けていると、一人ひとりが異なる状況のなか、さまざまな思いを抱えながら、次々と選択を迫られ、その都度悩み、迷いながら、折り合いをつけていく姿がみられた。苦しみや怒り、さまざまな気持ちを抱えながら、必死に生きている被災当事者の方々の語りにひたすら耳を傾けることで立ち現れてくるのは、その方の人生、生きざまであるように筆者は感じている。ここにあるのは、支援する、支援されるという単純な関係を越えたものだと考えられる。筆者は、このような経験を通じて、共にこの時代を生きる人間として、生きてゆくことについてのさまざまな想いを受け取らせていただいている。

#### さいごに

この10年、被災当事者の方々とお話ししていて痛切に感じることは、一人ひとりが「10歳年を重ねた」ということである。ここで紹介した手塚さんは、一緒に避難されてきたご主人様をこの夏に亡くされ、ご自身も80歳になろうとしている。手塚さんの他にも、筆者がかかわってきた方で、家族を亡くされた方、ご自身が病を抱えるようになった方、



亡くなられた方も少なくない。筆者は、ふるさとを離れ避難先で一生を終えるということは、どれほどつらいことだろうかと思ひながら、何もできないことを歯がゆく感じながら、かかわりを続けている。

さまざまな想いを抱えながら生きている被災当事者の方々と過ごす中で、本シンポジウムは、若い世代の方々の経験と思ひにふれることができる貴重な機会となった。もちろん、楽観的に考えることは控えたいが、彼らが私たちに伝えてくれた思ひ、10年経ったその先への視点は、これからの福島の、日本の未来を少しだけ明るく照らしてくれるように感じている。そして、この場にいる私たち全員が、彼らから学んだこと、受け取ったことを「自分のこと」として大切に抱えながら、生きてゆくことが重要である。少なくとも、筆者は、そうすることが彼らにとっての上の世代の人間としての責任であるように感じている。

だからこそ、これからも、SSNの仲間と活動を続けながら、被災当事者の方々の唯一無二の人生の物語りを、ひたすら聴かせていただければと思っている。

## 謝辞

筆者と出会って下さり、さまざまなお話を聴かせてくださった福島の方々、語りを掲載することを快諾して下さった手塚文子さん、そして本シンポジウムに参加し、貴重な語りを受け取ってくださった皆さまに、こころから感謝申し上げます。

## 引用文献

蟻塚亮二：3.11と心の災害；福島にみるストレス症候群。大月書店，2016

アルフォンス・デーケン：よく生き よく笑い よき死と出会う。新潮社，2003

アメリカ国立子どもトラウマティックストレスネットワーク，アメリカ国立PTSDセンター：災害時のこころのケア；サイコロジカルファーストエイド実施の手引き（原書第2版），2011

倉光修：動機づけの臨床心理学；心理療法とオーダーメイド・テストの実践を通して。日本評論社，2000

野村豊子：回想法・ライフレビューの倫理を巡って。日本福祉大学社会福祉論集136：15-38，2017

辻内琢也：原発事故避難者の深い精神的苦痛；緊急に求められる社会的ケア。岩波書店，世界835：51-60，2012

